

〔論文〕

語構成から見た方言オノマトペのタイプと 意味の関わりについて

川 崎 めぐみ

名古屋学院大学商学部

要 旨

方言のオノマトペには4つのタイプが存在する。語基レベル慣習化タイプ、語レベル慣習化タイプ、意味慣習化タイプ、そして1拍語基のタイプである。語基レベル慣習化タイプは、語基が定着して使用されているもので、多数の派生形を有している。語基の意味によってその派生形の種類が異なるという特徴を持つ。語レベル慣習化タイプは、一般語彙と同様に、語の形と意味とが密接に結びついており、語から場面や描写対象が明確にイメージできる。用法が固定的とも言える。意味慣習化タイプは、ある意味分野を表す語が多数存在し、語群とも呼べるものとなっている。互いの語の意味の違いが明確ではないという特徴を持つものである。

キーワード：方言オノマトペ, オノマトペ辞, 方言オノマトペのタイプ

On the Relationship of Meaning and Types of Dialect Onomatopoeias Classified from Word Structure

Megumi KAWASAKI

Faculty of Commerce
Nagoya Gakuin University

本研究で行った「山形県寒河江市方言オノマトペ調査」はJSPS 科研費 25770170の助成を受けたものです。

発行日 2016年3月31日

1. はじめに

オノマトペの研究には、小林(1933)、Waida(1984)、笈・田守(1993)、田守・スコウラップ(1999)のように、形態の分類を中心としたものが多く見られる。方言のオノマトペの研究の最初期とも言える都竹(1965)も、オノマトペの形態を分類するところから始まった。この中で、都竹(1965)は東北方言に「ラ」という要素が多く見られるなど、それまで知られてこなかった方言オノマトペの特徴の一端を明らかにしている。

筆者もまた、方言オノマトペの研究において形態の分類を行ってきたが、形態の特徴としては同じ分類とされるものの中にも語構成が異なるものがあることが見えてきた。例えば、「ばったりと倒れる」の「ばったり」はA ッ Bリ型と分類されうるが、同じA ッ Bリ型である「ゆっくり走る」の「ゆっくり」とは語構成が異なる。「ばったり」は「ばたばた倒れる」「ばたっと倒れる」「ばったんと倒れる」など、「ばた」という語基を基礎として、反復や促音、撥音などの要素との組み合わせにより、様々な語形を取り得るものである。一方、「ゆっくり」は語基として「ゆく」を取り出すことができなくもないが、その「ゆく」に明確な意味があるとは考えにくく、「ゆく」を基礎とした語形の派生ができない。このように、表面上、語形が同じ分類となっても、語構成を考えると異なるタイプのオノマトペと捉える必要のあることがわかる。

そして、この語構成から見たオノマトペのタイプが、意味との関わり方においてもそれぞれが特徴的な様相を見せる。本稿では、方言のオノマトペにおいて、語構成から見たタイプを整理し、意味との関わり方を見ていくこととする。

なお、本稿で使用するオノマトペの用例は、共通語以外のものは、筆者の出身地である山形県寒河江市方言のものをを用いている。

2. オノマトペの語基とオノマトペ辞

オノマトペを構成する要素は、語基とオノマトペ標識と呼ばれる要素であると言われてきた。「ばたばた」「ばったん」「ばたりっ」などのオノマトペでは、「ばた」の部分が語基、反復、促音、撥音、「リ」がオノマトペ標識(Onomatopoeia markers)と呼ばれてきた。オノマトペ標識はWaida(1984)がオノマトペに特徴的な要素として挙げたものである。ただし、「ばったーん」などに出てくる長音はWaida(1984)ではオノマトペ標識に含まれていないが、「ばったん」と「ばったーん」は別語形として扱う研究があり、オノマトペ標識に含むのか否かといった問題が生じる。また、促音などは「暑い」を強調した「あっつい」などにも出てくることなど、オノマトペに特徴的であるのできるのかどうかといった問題がある。

そこで、拙稿、川越(2011)、川越(2012)ではオノマトペ辞という用語を用い、オノマトペ辞に含む要素を促音、撥音、「リ」、「ラ」の4つとした。そのうえで、促音は非反復形に付加される基本的な要素として、他のオノマトペ辞とは区別した。

「ラ」については、現代共通語においては「ふっくら」「うつらうつら」など一部のオノマトペ

には見られるが、ほとんど生産性のない要素として、Waida (1984) ではオノマトベ標識に含まれていない。しかし、方言オノマトベ、とりわけ東北方言においては「バタラバタラてやがますい(喧しい)」「ベタラッとひつついっだ(くつついている)」「いずれも山形県寒河江市方言)のように、「ラ」が頻出し、様々な語基に付加され、生産的に用いられている。そのため、オノマトベ標識には含まれていないが、オノマトベ辞には含めておくこととする。なお、「コ」という要素もまた、方言のオノマトベに時折見られるが、「ラ」ほどは生産性がないため、オノマトベ辞には加えないでおきたい。

そして、オノマトベに繰り返しの形が多いように、オノマトベにとって反復は重要なものであるが、反復はオノマトベ辞には含まず、語基から語としてのオノマトベが派生する最初の段階において、反復か非反復かに分かれ、その後オノマトベ辞が付加されると考える。一方、長音はオノマトベ辞には含まず、強調を表す強調辞として扱う。オノマトベが派生する段階として、語基から非反復/反復かが選択され、それにオノマトベ辞が非付加/付加の選択によってオノマトベが語として成立する。語として成立したオノマトベに対し、長音などの強調辞が加えられることで、さらに語形のバリエーションが増えていくものとする。語基から語としてのオノマトベへの派生を、「ゴロ」という語基を例に図示すると、図1のようになる。

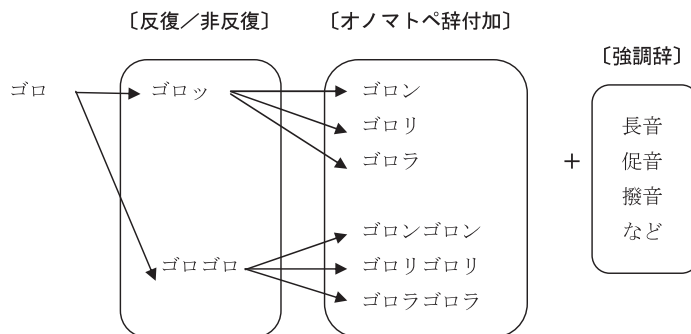


図1 語基「ゴロ」からの派生

3. 語構成から見たオノマトベのタイプの分類

3.1 語基レベル慣習化タイプ

本節では、語構成の視点から見た場合、どのようにオノマトベが分類できるかを見ていきたい。

まず、オノマトベが語基とオノマトベ辞から成ることは2節で述べたとおりであるが、語基を基礎としたさまざまな形のオノマトベ(語)への派生力が強いタイプのものがある。図1の「ゴロ」という語基のように、反復/非反復とオノマトベ辞との組み合わせによってつくられる語形のパターンを語型と呼ぶが、その語型が多いという特徴を持っている。

一方で、語基から語としてオノマトベが派生するとき、語基の意味はそれほど変化しない。「ゴロツ」と「ゴロン」では「転がる」という意味が共通しており、語基の意味もまた「転がる」と

いう意味を有している。ただし、その転がり方が異なる。「ゴロッ」では転がる動きが比較的速いものであると感じられるのに対し、「ゴロン」では「ゴロッ」に対して転がり方が若干大きく、転がった後の様子に焦点があるように感じられる。これは「余韻」と言われることがある。

このように派生するオノマトペ（語）が多いために、語基の意味が比較的明確で、さまざまな語形を有するタイプが存在する。もう少し言えば、語基のレベルでの形や意味が定着しているものであり、語基へのオノマトペ辞の付加によって動きの種類や音のあり方などを表現し分けられるものである。つまり、語基レベルで慣習化されたタイプである。これらはオノマトペ辞の影響が強く、ある意味、典型的なオノマトペのタイプであるとも言えるだろう。

なお、この語基レベル慣習化タイプは、語基音の清濁による対比的な意味を持つ語基が存在することが多い。「ガタガタ」と「カタカタ」、「ゴロゴロ」と「コロコロ」などである。語基音が「ガタ」「ゴロ」と濁音を有する場合、その動きや音が大きく、不快で荒々しいなどのイメージを喚起させる。一方、「カタ」「コロ」といった清音の語基では、動きや音が小さく、かわいらしいなどのイメージがある。これを清濁対立といい、とりわけ語基レベル慣習化タイプのものに多く見られるようである。

方言という観点においては、この語基レベル慣習化タイプのオノマトペは共通語と同じ語基を有するものが多く、方言独自のものも少ない。方言独自の意味を持つ語基があったとしても、方言であるという意識が希薄なことが多いという特徴を持っている。東北方言に時折見られる「ラ」のように、オノマトペ辞のみが方言独特のものである場合もある。

3.2 語レベル慣習化タイプ

次に、語基から派生した語形がきわめて少ないタイプがある。語基の意味は、基本的に語として成立しているオノマトペの意味から推定するため、複数の語形があったほうが意味を設定しやすい。しかし、このタイプはとりうる語型が1つ、あっても2つ程度である。東北方言で広く用いられている「ワラワラ」という語がこれに当たる。「ワラワラ準備してきた（急いで準備してきた）」のように、急ぐことを表す。これは「ワラ」という語基は取り出せるものの、ABAB型の「ワラワラ」しか派生しないため、語基からの派生という考え方そのものに違和感がある。

この「ワラワラ」のようなオノマトペは、語のレベルで定着しているものであり、方言オノマトペで言うならば、伝統的な方言に属するものである。いわば語レベル慣習化タイプとも言うべきタイプであり、オノマトペではない一般語と同様、共通語にない語形であれば、頻繁に方言辞典や方言集に採用される。一般語と同じような語彙調査が可能なタイプでもある。

語レベル慣習化タイプのオノマトペは、オノマトペ辞と語基が密接に組み合わせられ、ほとんど一体化した状態で使用される。よって、語基から反復/非反復、オノマトペ辞の付加/非付加による表現の区別がしにくい。付加されるのはオノマトペ辞ではなく、ほとんどが強調辞である。

強調辞による語形の変化は、「ワラワラ来た」→「ワラワラ来た」のように長音や促音、撥音による形の変化であり、オノマトペ以外の一般語彙にも見られる。また、音遊び的な要素が見られることもある。「アッケラホン」→「アッケラポン」のように中心的な語基音にほぼ変化は

ないが、一部の語音にバリエーションが見られる。

語レベル慣習化タイプは、描写対象との関連度が高い。語ごとの意味やイメージが明確であり、その語を口にするだけでどのような動作か、どのような音か、どのような感情かが細かく具体的に想起される。「シュッシュッポッポッ」といえば機関車、「パオーン」といえば象というように、イメージ喚起力が非常に強く、言語的、文化的な背景による影響が強く、具体的描写性が強いと表現すべきものである。

3.1の語基レベル慣習化タイプのものは、「ガタンガタン」「ガタッ」「ガッタン」など、動きや音のあり方を細かく表現し分けることができ、その点では臨場感があると言えるかもしれない。しかし、語レベル慣習化タイプほど、描写対象が明確ではない。共起する語や文脈の中にあってもこぞ発揮される臨場感であるのに対し、語レベル慣習化タイプのオノマトペは、語単独で場面や描写対象を想起させてしまう。山形県寒河江市周辺の方言では、「コキコキ」という食感といえば、こんにゃくや餅を噛むときの小気味よい食感を表すものと決まっている。それ以外のものには基本的に使用されないのである。

3.3 意味慣習化タイプ

続いて、特定の意味の中において、語群とも言うべき多数の語が存在する場合がある。東北地方に見られる「グイラ」「ボット」「ボッポリ」「ビラット」「ビラリ」といった語であるが、すべて「急に」「いきなり」といった動作への取りかかりの早さを表している。川越(2012)でも示したように、これらは元々あったはずの具体的描写性が希薄化しているものと考えられる。

もちろんもとより持っていた具体的描写性が残存し、使われやすい傾向のある文脈が存在するなど、中心となる用法はあるものの、話者によってはこれらの語を一切の区別なく、そのときの気分で使っているということも起こり得る。音の近い語基のものも多く、類似した音にずれていくこともある。言ってしまうと、似たような語型と音でさえあればいいわけで、意味の範囲と語群の結びつきのみが慣習化され、語形のほうがかえって自由度を増してしまっている。

ほかには、「少しだけ」という意味の「チョット」「チェット」「チョコラット」など、「むりやりに」という意味の「ギリギリ」「ビリビリ」「ムリムリ」といった語群が見受けられる。現代共通語ではあまり見られないが、方言ではこのタイプが多く見られる。

3.4 1拍語基タイプ

実を言うと、ここまでは語基の拍数が2拍のものを中心に述べてきた。オノマトペの語基は組み合わせという点で、もちろん2拍語基のほうが種類が多いわけであるが、1拍の語基も存在する。この1拍語基はのものは、語基の意味が捉えにくいものが多い。形としては、1拍の語基に撥音または促音のオノマトペ辞が付き、後接辞の付加が必須となる。2拍語基よりも具体的描写性は弱めではあるが、使用頻度は高い。

とりわけ、関西地域に多く見られるように思われる。豊島美雪とこそっと関西オノマトペ研究会(2010)の書名にもなっている「キュッと曲がって90°！」や「シュッとしている(垢ぬけ

ている)」などがある。共通語においても「ずっと座っている」「ぎゅっと握る」など、多くの語が存在する。ただし、この1拍語基のものは、意味慣習化タイプのもを除き、考察が十分ではないため、本稿では措いておきたい。

4. オノマトペのタイプと意味の関わり

では、3節で示したオノマトペのタイプのうち、語基レベル慣習化タイプ、語レベル慣習化タイプはそれぞれどのように用いられ、どのように異なっているのか。その用法や意味との関わり方についてまとめておきたい。

4.1 語基レベル慣習化タイプにおける意味と語形の関わり

語基レベル慣習化タイプにおいて、語形は語型、すなわちオノマトペ辞との組み合わせが重要である。促音、撥音、「リ」について、従来、オノマトペ標識の研究においては、促音は動きの急激さや速さを表すと説明されてきた。しかし、那須（2007a, b）では促音の韻律調整機能について言及され、無標の語尾としての促音があることが示されている。これを踏まえ、促音を無標の促音n、速度を表す促音sに分け、促音、撥音、「リ」が付加されることで付加される意味を示したのが、拙著、川越（2012）にも示した表1である。

表1 オノマトペ辞 促音n, 促音s, 撥音, 「リ」の付加の意味

	促音n「ッ」	促音s「ッ」	撥音「ン」	「リ」
動作の速さ	—	速い	速い	(とても早い)
動作の終了	—	—	終わらない	終わる
動作の程度	—	小さい	大きい	—

オノマトペ辞「ラ」については、動きの速さではなく動きや音の程度の大きさを表す。例えば、「バタバタてやがますい(ばたばたとうるさい)」と「バタラバタラてやがますい」を比較すると、「バタラバタラ」のほうが動作や音が大きく感じられる。これは川越（2011）で詳しく述べた。とりわけ、「ゴロラゴロラて怠けっだ(ごろごろと怠けている)」のように、マイナス評価の意味を含む場合には、そのマイナス評価的な意味が強調するものとして用いられる。

以上から考えられることは、語基レベル慣習化タイプにおいては、語基の意味との関わりから付加されるオノマトペ辞の種類が特定されるということである。よって、「ゴロ」のように多義的な意味を有する語基の場合、転がる動きと音、怠ける様子、雷の音などという複数の意味を持つが、それぞれにおいて付加し得るオノマトペ辞が異なってくる。意味が語形を決定するということが起こる。

特に、音や動きを有する場合はオノマトペ辞、促音、撥音、「リ」が付加し得るかどうかに関わり、マイナス評価の有無が「ラ」の付加に関わってくる。この音や動き、マイナス評価をどう感じ、どう表現するかによって、個人の使用の中でも揺れが出てくるものと思われる。

4.2 語レベル慣習化タイプにおける意味と語形の関わり

一方、語レベル慣習化タイプにおける意味と語形はどのように関わるのか。2015年3月5日に行った山形県寒河江市方言オノマトベ調査をもとに示していきたいと思う。山形県寒河江市方言オノマトベ調査は、寒河江市内に在住の60代以上の男性2名、女性4名に対して、面接調査を行ったものである。

語レベル慣習化タイプでは、語の形が基本的に1つであり、意味・用法が個人ごとに明確である場合が多い。今回の調査の項目の1つに「トキトキ」という語がある。「トキトキ」は共通語の「どきどき」に通じるものと考えられる。よって、次の3つの場面を設定し、使用の可否を問うた。

- (1) 走ってきて、心臓ときときした。
- (2) 緊張して、心臓ときときする。
- (3) ときときてねで、落ち着け。(落ち着きがない)

「心臓がどきどきする」に通じるであろう(1)は使用者なし、(2)は大江町寄りの話者1名のみの使用、(3)「トキトキてねで落ち着け」という用法は6人全員が使用できると答えている。

ここからわかるのは、寒河江市方言においては(3)が一般的な用法であるということである。(1)は使用されるとするならば、「どきどき」に対して清濁対立的な意味を有すると考えられ、語基レベル慣習化タイプとも取れる。けれども、実際は(3)が一般的である。つまり、語基の意味よりも、語としての意味・用法のほうが優先されるという点で、語基レベル慣習化タイプとは一線を画すものであることが再確認できる。

特に(3)は子供に注意を促す場面で多用されるという内省を得ており、語レベル慣習化タイプは使用場面も密接に結びついているということがわかる。使用場面に関して言えば、子供などに注意したり、相手を批難したりする場面が、方言オノマトベの意味には多いような印象を受ける。小野編(2007)『オノマトベ辞典』は、方言オノマトベを多数収録したオノマトベの辞典であるが、ここに掲載されている「ちががちがが」という語は、次のような用例が挙げられている。

ちががちがが

〔方言〕 落ち着きがなく、いい加減なさま。筋道の立たないさま。めちゃくちゃ。

「そんなにちががちががしんでね」〈茨城県〉

「仕事手早いけど、ちががちががで困る」〈石川県〉

「さっぱり話がちががちががになってまった」〈岐阜県〉

「一人ずつしゃべらな(話さない)と 頭ちががちががになる」〈福井県〉

茨城県と石川県の例が相手への批難を示す用法となっている。このように対人的な意味・用法が含まれたものが語レベル慣習化タイプのオノマトベには多いのか。これは現在行っている全国アンケート調査にて明らかにしていく予定である。

5. まとめと今後の課題

以上、雑駁ではあるが、語構成から見たオノマトペのタイプを整理し、語基レベル慣習化タイプと語レベル慣習化タイプの形が、その意味とどのような関係にあるのかを述べてきた。ただ、語基レベル慣習化タイプであっても、語レベル慣習化タイプのように意味によっては派生形がほとんどなくなるものや、基本的には語レベル慣習化タイプと考えられるものであっても、複数の形を持ちうる場合があるなど、十分に整理しきれていない。今後はオノマトペ辞による語基からの派生の過程との関係を踏まえながら、各タイプの特徴をより詳細に記述していくことを課題としていきたい。

参考文献

- 苧阪直行編著（1999）『感性のこぼれを研究する 擬音語・擬態語に読む心のありか』新曜社
- 小野正弘編（2007）『擬音語・擬態語4500 日本語オノマトペ辞典』小学館
- 筧壽雄，田守育啓編（1993）『オノマトピア 擬音・擬態語の楽園』勁草書房
- 角岡賢一（2007）『日本語オノマトペ語彙における形態的・音韻の体系性について』くろしお出版
- 川越めぐみ（2011）「山形県寒河江市方言におけるABラABラ型オノマトペについての考察」『国語学研究』50, pp. 147-160
- 川越めぐみ（2012）『東北方言オノマトペの形態と意味』東北大学博士学位論文
- 川越めぐみ（2013）「山形県寒河江市方言オノマトペの意味とオノマトペ辞の関わりについて」『文化』76（3・4）, pp. 288-269
- 小林英夫（1933）「国語象徴音の研究」『小林英夫著作集5 言語美学論考』みすず書房1976（『文学』1巻8号より再録）
- 田守育啓，ローレンス・スコウラップ（1999）『オノマトペー形態と意味—』（柴谷方良・西光義弘・影山太郎編集日英語対照研究シリーズ（6））くろしお出版
- 都竹通年雄（1965）「方言の擬声語・擬態語」『言語生活』1965-12, pp. 40-49
- 豊島美雪とこそっと関西オノマトペ研究会（2010）『キュッと曲がって90°！関西オノマトペ用例集』組立通信
- 那須昭夫（2007a）「オノマトペ語尾の分布と相互の関係」『筑波日本語研究』12, pp. 1-25
- 那須昭夫（2007b）「オノマトペの言語学的特徴—子音の分布と有標性—」『日本語学（特集：オノマトペと日本語教育）』26-7, pp. 4-15
- 山形県方言研究会編（1970）『山形県方言辞典』山形県方言辞典刊行会
- Waida, Toshiko（1984）“English and Japanese Onomatopoeic Structures”『女子大文学 外国文学篇』36, pp. 55-79